芦高三十年史発行にあたって

学校長　　野崎　倉仁

昭和４５年は芦屋高校にとつては県立芦屋中学校の創設からかぞえて、春秋を閲すること参旬の記念すべき年である。

世に校歴３０年という年数は必ずしも古きを誇るに足る年月とは言えぬかもしれない。しかし、本校の歩み来たった此の３０年は我が国にとっても尋常の３０年ではなかったごとく、本校にとっても並み並みならぬ経過をたどったことを忘れてはならない。

未曽有の困難、敗戦、とそれに伴なう混乱の幾年かは、いわば亡国の危機に瀕していたと言っても過言ではなかろう。爾来、風雪２０余年、世界情勢が幸するところ大であるとはいえ、今や経済的には世界における屈指の大国と自他共に認めるところとなった我が国も、現状を具さに検討する時、この１９７０年代を開く昭和４５年は安易に繁栄を謳歌できる状態でないこと、これまた内外ひとしく認めるところであり、次代を背負うべき青少年育成の場である高校も一段の緊張を要することは言うまでもないことである。

この故に、灰燼の裡から立ちあがって茲に創立３０周年を迎える本校は、ただ年月経過の１つの節として此の年を記念するだけでなく、越え来たった幾多の苦難と、先人の苦心経営の跡に稽え、新たに開かれつつある時代に我が国が求めている中核的人材の養成へ一同覚悟を新たにする年として記念の意義を認めたい。

この記念の一事業として過去５カ年にわたる本校の経過を校史の形で残すにあたり、古人の語を援いて本校の将来を期する言葉とする。

始めて作すや翕如たり、之を縱つや純如たり、皦如たり、繹如たり、と。